



## 第 46 回 「奇跡の地図を作った男」の言葉

下山晃著「奇跡の地図を作った男」（副題「カナダの測量探検家デイヴィッド・トンプソン」）（大修館書店、2021年8月）は現地調査に基づくトンプソンの評伝で、著者の深い考察と鋭い論点が至る所に記されています。トンプソン（1770-1857）は北米大陸の広大な未踏地域を探查してハドソン湾から五大湖周辺の精密な地図を作った偉大な測量探検家です。その踏破面積は490,000km<sup>2</sup>で、踏破距離は100,000kmに及び、これは伊能忠敬が生涯に踏破した33,700kmをはるかに上回っています。驚くべきことに探查の旅には妻と子供が同行することもあり、その同行距離は42,000キロを超えました。トンプソンはなぜこのような偉大な業績が上げることができたのでしょうか？ この疑問を抱きつつ本書を読み進むうち、トンプソンの考え方・生き方は独創的研究をする研究者、科学者の考え方、態度に通じていることがわかりました。

トンプソンの業績の原点は幼年時代の夢にあったようです。ロンドンの極貧の母子家庭に育ちましたが、読書を通じ立派な探検家になりたいという夢をもち、それを生涯にわたり抱き続けました。周りの者たちとはいつも違った視点で物事をよく観察して考え、やがて見習いとして測量の仕事につくと生来のポジティブで旺盛な好奇心のもとに知識を増やし、徳を磨き、一層高度な技術を身につけるよう自己錬磨と変容を続けました。24歳の青年になったころにはあふれる好奇心と人並み外れた自信、意欲、熱情がみなぎっていたそうです。そして幼年時代の夢を実現するため、空白部のない完璧な地方地図の作製に励みました。これを科学者に置き換えて考えると、幼いときの科学に対するあこがれと夢を抱き続け、自己研鑽により独創的な研究者になる努力をしたことと似ています。

さらに感服すべきは、若年時に事故で右足の自由を失い、さらに別の事故で右目を失明するという困難にもかかわらず、「左足は思い通りに動かせるし左目は何でも見ることができる。」と前向きに考えたことです。生涯にわたって片足を引きずりつつ、左足と左目を使って測量を続け地図を作りました。夢こそ現実にすべきものという強い信念のもとに、何としても幼年時代からの自分の夢を叶えようとしたのです。

トンプソンは不屈の大胆さに加えて、極限まで突き詰めた工夫と配慮を重ね合わせる繊細な周到さを備え持ち、探查活動が困難であればあるほど、もっと忍耐強くあることを自分に課したそうです。そしてどんな仕事も、上司から命じられた単なるビジネス業務ではなく、神から与えられた使命・天命だと念じて、誠心誠意の勤勉さを心がけて取り組みました。科学研究でも、研究テーマを見つけるときは周到に備え考える必要がありますが、いざ始めたら多くの困難を乗り越える忍耐強さが必要ですね。

当時は毛皮ブームの時代であり、関連会社は毛皮を手に入れるため手段を選ばず利益を貪っていました。そして縄張りの先取権争いに勝つために未開地の正確な地図を求めました。この求めがトンプソンに多くの過酷な仕事を与えたのです。トンプソンは未開地を踏破する際、先住民の言葉と文化を積極的に学び、現地の現状や歴史を読み解き、また人物を見極める洞察力を身につけました。トンプソンが厳しい環境の中で長年にわたり黙々と測量・地図作成の仕事に打ち込んだのは、そのような仕事によって培った先住民に対する

深い敬慕の念があったのです。著者は「先住民に対するこのような姿勢こそがトンプソンが遺した最も得意で偉大な仕事であり、それは今日のカナダにおける人種問題にも豊富な示唆を与え続けている。」と指摘しています。以前はそうではなかったとのことですが、著者は「カナダ史研究ばかりでなく多くの学問研究分野で、問題を根底から問うことなく権威や流行になびくそうした傾向は残念ながら今でも見られる。」と憂えています。流行になびく傾向は科学研究でも見られます。現に日本でも欧米で活発に研究されているテーマを後追いしている例がよくあります。

著者は「近代ヨーロッパによる植民地主義は寛容と博愛を解きながら排除と差別を押し付ける一神教の熱狂的布教活動と一体であり、先住民は私たち日本人の感覚を超えて見下され差別された。」と指摘しています。当時のイギリス東インド会社などは奴隷狩りを大々的に行う世界最大の奴隷貿易会社であり、イギリスの植民地政策を先導した粗暴な武装組織だったそうです。また 19 世紀末までに大西洋を越えた移民の多くは政治犯、囚人、孤児、奴隷などでした。このような状況下で毛皮取引を扱う会社は目先の利益だけを求めたため、先住民との良好な交易関係を全部失い、やがて会社の利益が先細りしました。科学研究でも流行ものを追い、目先の成果だけを求めていると、やがてその研究分野は先細りしてしまいます。現に私はそのような例をいくつか思い出します。

トンプソンが生きたのは奴隷制や人種差別が広がっていった時代です。その中でトンプソンが時代の趨勢や世間の常識に取り込まれずに今日でも輝きを放つような考え方、生き方を貫いたのは驚嘆に値します。当時の嘆かわしい時代でもトンプソンは愚痴や不満だけで済ませることはなく、日記や著作物は数々の冒険譚と素晴らしいユーモアに満ちていたそうです。要するにトンプソンは若いときの夢を実現するため、時代の趨勢とは全く別の考え方で仕事をしていたのでしょう。この生き方は私が前回（第 45 回）紹介した出家の人生と共通するところがあります。

トンプソンは 1782 年～1812 年の測量結果をもとにカナダ北西部の地図を初めてまとめ上げました。これは 30 年にわたって積み重ねた勤勉の集大成です。それは実際の地形を寸分の狂いもない正確さで描写した奇跡の逸品です。当時のカナダ、アメリカでは探査地の領土確定に関する問題がありましたので、トンプソンの業績は建国期のアメリカにとっても国宝級だったそうです。トンプソンは 1812 年の引退後 2 年の間に「北西領域地図」を完成したのですが、これはカナダ、アメリカ全体にとっても幸運なことでした。

しかし優れた業績にはいつも負の効果がつきまとうものです。J. シンプソン（ハドソン湾会社の重鎮で「サー」の称号をもつ）はトンプソンが生涯をかけて製作した不滅の業績をすべて盗み取ってロンドンの地図業者に送り付けました。さらにトンプソンが地図製作会社に残した地図や測量の記録は J. シンプソンによってロンドンの地図製作者・銅板印刷業者のアロースミス家に送られてしまいました。こうしてトンプソンの業績はすべて盗み取られてしまったのです。その後トンプソンをさらなる不幸が襲いました。生活のために十分な収入が得られなかったばかりか、70 歳になると耳はほとんど聞こえなくなり、残っていた左目も完全に失明してしまったのです。まさに神にも見放されたような窮状続きの晩年でした。そして 1857 年 2 月、87 歳を前にしてみすばらしい小さな家でひっそりと息を引き取ったそうです。

しかし本書はここで終わりではありません。トンプソンの没後 30 年近くを経てから、カナダ国立地理調査局の J. B. ティレルが作者不詳の見事な地図を見つけました。それはトンプソンの日誌とフィールドノートと

合わせて保管されていた黄ばんだ大きな北米西部の地図、まさに本書の題名の「奇跡の地図」だったのです。こうしてトンプソンの偉大な業績がティレルにより発掘されました。ティレルはこれらの資料をもとに「D. トンプソンの西部アメリカ探検記」を執筆し、それは1916年にはシャンプラン協会の叢書本として出版されました。幼いときのトンプソンの夢がこの時ついに成就したとあってよいでしょう。ティレルが出版原稿を書き上げたのと同じ時期、1915年、カナダ政府は100年以上前にトンプソンが作製した北西部地図をほぼそのまま用いて「カナダ公式地図」として公開しています。数々の奇跡の地図を残したトンプソンはこうして復権を遂げ始めたのです。なお、ティレルが無名のトンプソンを最大の賛辞で紹介すると歴史家が両者のこき下ろしに動いたそうですが、これも負の効果とあってよいでしょう。科学研究の場合でも、優れた研究成果ははじめのうちは無視され、次にこれをこき下ろす輩が現れます。そのような輩を相手にする必要はないでしょう。

しかしやがてトンプソンの生き方と偉業に驚嘆する人たちが増え、トンプソンを再評価する動きが多様な形で現れました。著者は「優れた地図職人トンプソンの生き方を、観察眼や洞察力に加え抜きんでた測量の技術と異文化に対する深い理解や愛情、そして強い責任感と不屈の大胆な行動力が合わさって織りなした悠揚な交響詩。」と表現しています。最後まで神は冷徹に沈黙の眼差しを注ぐだけでしたが、幸運の女神が彼の生き方に救いの手を差し伸べたのです。

トンプソンの実像が知られていくにつれ、多くの人たちが次々と心を動かされつながりを広めていきました。トンプソンは200年の時代を超えて見知らぬ同士の互いの心を結び合わせてくれたのです。著者は「自然、家族、人々を愛し、敬虔な思いと強い気持ちを秘めながら仕事にはできる限りの精魂をこめて孜々営々となすべきことを積み上げる——それがトンプソンの生き方だった。」と評しています。本書の末尾では「それ以上に当たり前の生き方が、この世にあるのだろうか・・・」と記し、「トンプソンは極貧の中に生まれ極貧の果てに生涯を終え、その業績が剽窃され忘れられ続けてきたものの、500年または1000年に一度現れるかどうかの人物だった。」と評しています。トンプソンの生き方や業績は時代の通念・常識をはるかに超えていたので、それが世に評価され始めたのはトンプソンの死後半世紀以上もたってからだったのです。科学の場合でも、基礎研究はすぐには人々の役に立たないので埋もれたままになります。しかし周囲の研究が進むにつれ、やがて研究が注目される日がくるのです。それが半世紀以上後であっても構わないでしょう。

本書には美しい挿絵、写真が多く掲載されています。その中には「奇跡の地図」全景のみでなく、トンプソンの没後100年に発行された記念切手、さらにはティレルが1926年に探りあてたトンプソン夫妻の小さな墓にその後建てられた顕彰墓碑など、トンプソンとその偉大な業績の証が見られます。